房総の戦国期から江戸初期における一様相

－房総における正木頼忠の証跡－

齋　藤　修　佑

目　次

1　はじめに …… 669

2　正木頼忠に関連する城跡 …… 671
　2－1　序 …… 671
　2－2　正木頼忠と４つの城 …… 671
　2－3　考察 …… 683

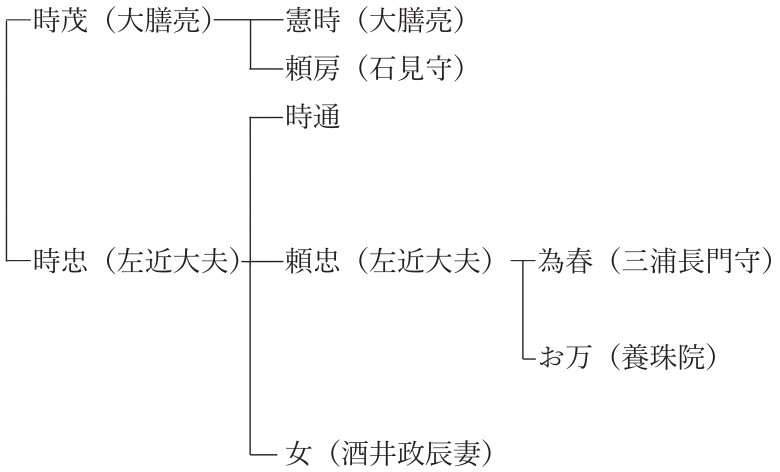
3　正木頼忠と宝篋印塔 …… 683
　3－1　序 …… 683
　3－2　安房地域の宝篋印塔 …… 684
　3－3　考察 …… 686

4　おわりに …… 690

1　はじめに

房総の戦国期から江戸初期にかけては、多くの有力な人物達が土地等の利権を奪い合い、鎬を削っていた時代といえる。そして、戦の勝敗によって、この時代に生きた人物達の運命が決められてしまうということも当然としてあったのである。本稿は、この激動の時代を、房総において生き抜いた一人の人物である正木頼忠に焦点を当て、その証跡について考古学的に考察するものである。

正木頼忠(注1)については、『千葉縣安房郡誌』の名族及人物の項に記載があり、1989年の川名氏の「房総正木氏について―残された文書を中心に―」論考において、人物の詳細が述べられている。また、勝浦市史や和田町史といった市町史にも記載があり、より詳細なものとしては、1998年の滝川氏の「その後の勝浦正木氏」論考において、文献史料に基づく人物像が述べられている。



第１図　正木頼忠に関わる家系図

これらの先行研究を基にして、正木頼忠という人物について整理してみたい。

まず、出生であるが、出生の時期を明確に知ることができる文献史料は現状では無く、1989年の川名氏の論、1998年の滝川氏の論のどちらにおいても、確実な史料が遺る没年（忌日）から逆算した推定年を基にしている。これによれば、天文二十年（1551年）となる。この時期は、小田原を本拠とする北条氏康が椎津の武田氏、万喜の土岐氏等に下知して、正木氏の主君である里見氏の討伐を企てていたときである。

そして、頼忠が文献史料上に初めて明確に登場するのは、永禄九年（1566年）の北条氏政から正木時忠に宛てた書状の中にある。『三島神社文書』に頼忠の幼名「正木権五郎」、『三浦文書』に「権五郎」とあり、頼忠が16歳頃であった際の様子の記述がある。この文書中からは、父である時忠が北条氏に服属していることを示すことや、人質として送られた頼忠の生活の状況が明らかとなっている。

この後、滝川氏の論等で述べられているように、「１次史料からは確認できない」が、「その後の状況からみてもまず事実として認定される」、北条氏の人質としての頼忠が北条氏堯の娘である人物と結婚している。この際に、二男一女を儲けたと推定される。こうした事実について、人質としての立場でありながらも、「北条氏一門の婿という立場を獲得」（黒田2008）、「北条氏との間に構築された太いパイプや、その周辺に張り巡らされた人的コネクション」（滝川1998）、と考察されているように、北条氏にとって房総諸氏と通じる重要な人物とみなされていた可能性が指摘されている。

このように頼忠は、小田原で北条氏の人質として生活を送りながら、北条氏における立ち位置を確立していた。この後房総に帰国したものと思われるが、この時期については明確ではない。滝川氏は「三浦家系図伝等では天正三年という年次を与えているが、この点確証はない。」とし、「すでに房総に帰国している様子が古文書（正木文書）からもうかがえるので、それ以前であることは間違いない。」として、「天正三年には嫡兄たる時通、翌四年には父時忠が死去したという事実があり、しかも里見・北条間の盟約（房総盟約）が天正五年末に結ばれたことをみれば、おそらく彼の帰国は房総盟約にかかわるこの頃。つまり、兄時通が死去した天正三年から、房総盟約がなされた同五年の間とみてほぼ間違いないところであろう。」（滝川1998）と推定している。

このような説のほか、頼忠の帰国についての『正木家譜』、『寛政重修諸家譜』に記載される天正三年説がある。川名氏の論考では、「これは兄時通が天正三年十一月に没したので、これと附合し妥当の時期に思えるが、」と従来の天正三年説を肯定する一方で、天正七年（1579年）と推定される八月九日付安房妙本寺日侃の書状の宛名に、頼忠の官途名等である「正木左近将監殿」とあることから天正七年（1579年）に帰国したものと推定している（川名1989）。

これらのどの説に依拠したとしても、頼忠は天正三年（1575年）から、遅くとも天正七年（1579年）には房総に帰国していたと考えられる。それは、天正八年閏三月に（伊豆国）河津宛に頼忠が自身の子を返してほしいと懇願する書状を送っていることで裏付けられる。また、勝浦城主であった兄時通が天正三年（1575年）に、父時忠が天正四年（1576年）に、それぞれ死去したことにより、父兄に代わり家督を継承するため、房総に帰国せざるを得なかった事情があり、天正七年（1579年）までに帰国していると想定されるからである。

このように房総に帰国し、勝浦城主となった頼忠は、北条氏との間で構築した関係を活かし、里見氏の政権を支える重臣となる。その一端が、小田喜（大多喜）城主正木憲時の乱である。当時小田喜城を本拠とし、里見氏の家臣であった憲時であったが、天正六年（1578年）に当主里見義弘が病死したことにより、里見家内に内乱が生じた際に、安房国を領地として家督継承をしていた里見義頼に反旗を翻したものである。この乱の際に、頼忠は里見義頼に臣従し、里見軍の先鋒として活躍したとされている。また、頼忠は房総に帰国してからこの乱の前までは、「時長」と称していたことが知られているが、この乱の頃からは、里見義頼の一字を受けて「頼忠」と改名している。

この後、天正十五年（1587年）４月の妙本寺日侃から頼忠に宛てられた書状からは、前年に２人の息子を自身の元に呼び戻すことができたとされる。長男は早くに没したが、次男の為春という人物は頼忠と共に、里見家に仕えていたことが分かっている。

このように北条家との関係を良好に保ち、里見家の重臣としてまた勝浦正木氏の当主として一定の地位も保っていたようにみえたが、これを一変する出来事が起きる。

それは、天正十八年（1590年）に豊臣秀吉が北条氏を攻撃し、北条氏が滅亡した小田原合戦である。この際に、頼忠は里見家に仕えていたこともあり、里見家が上総国を没収されたことに伴い、関連する３つの城（勝浦城、吉宇城、興津城）及び領地を引渡し、安房国に退去することとなった出来事である。

安房国に退去した頼忠は、『安房志』によると長狭郡成川村に拠点があったとされている。さらにその後、慶長十一年（1606年）、慶長十五年（1610年）の『里見家分限帳』に丸郡平磯村・長狭郡八色村等で千石の知行を受け、環斉と名乗り、御一門衆と位置付けられている。この際に名乗った環斉という名は、川名

写真１　環齊屋敷跡

氏によると、「慶長十一年頃までの間に入道して、環斉と号した。」とあることから、出家して仏門に入ったことを示しているものと思われる。さらに、滝川氏によると、「現鴨川市内の成川という地には、環齋屋敷跡と伝えられる館状の遺構が残されているが、これは頼忠が安房に退去した後に住した館の跡だという。」とあり、現状の鴨川市内の遺跡で、鴨川市成川字関谷周辺を埋蔵文化財包蔵地の環斉屋敷跡（注２）（第４図）、として括る箇所と一致する。

その後、様々な論から、頼忠は、最終的な天下人となった徳川家康との関係性から、一定の待遇を与えられ、子息である為春と共に、晩年は和歌山に移住し、余生を過ごしたとある。

以上のように正木頼忠の人物像について、従来の研究からまとめてみたが、次章以降では、その証跡について、文献史料等の文字資料の記載を基に、城跡、宝篋印塔といった関連が推測されるものを取り上げて考察する。

２　正木頼忠に関連する城跡

２－１　序

房総において正木頼忠が関連した可能性がある城については、様々な文献史料等から、（１）勝浦城、（２）興津城、（３）吉尾城が知られている。さらに、これら以外に（４）葛ヵ崎城も関連する可能性があるため併せて本論の対象とする。

こうした、４つの城について、現在までの状況や文献史料等の記載、調査成果等をまとめて検討を行う。

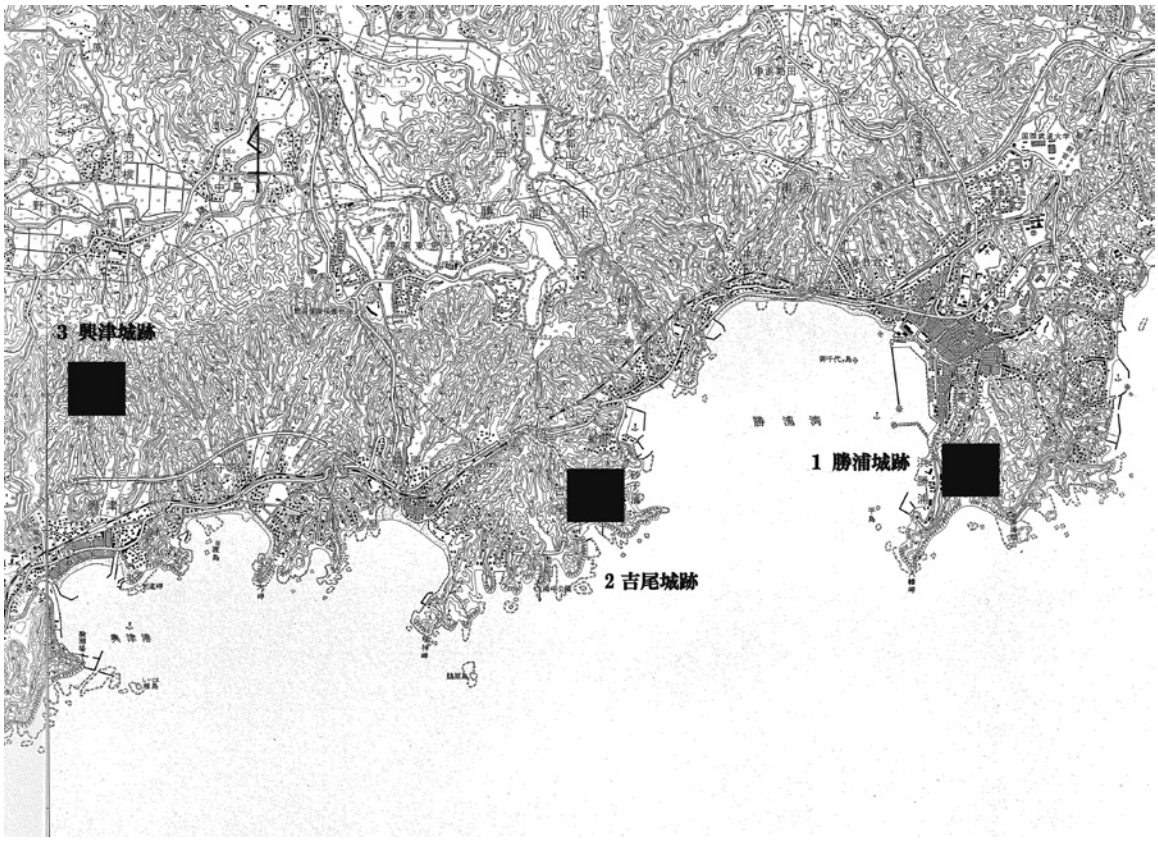
２－２　正木頼忠と４つの城

（１）勝浦城

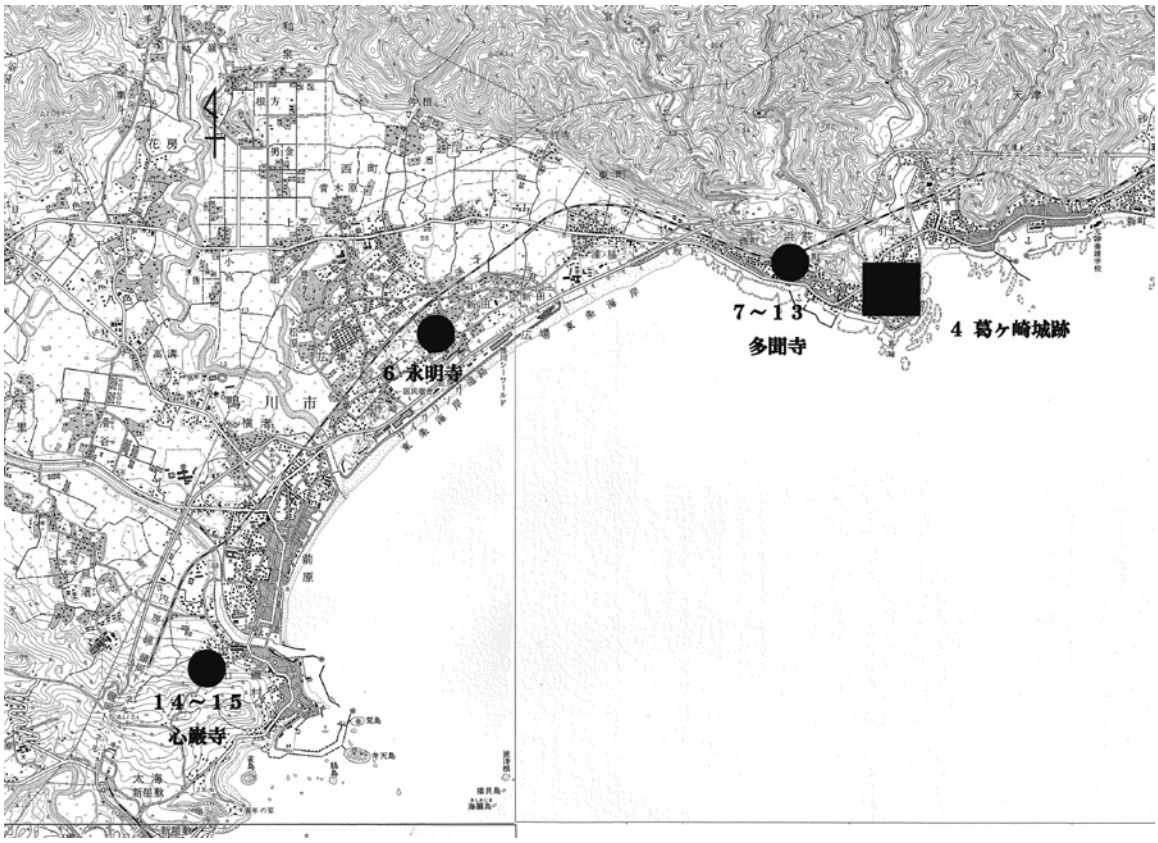
勝浦城は、勝浦市遺跡番号105（県台帳では中－７）勝浦城跡として、千葉県埋蔵文化財分布地図に掲載されている。範囲については、分布図で括られている箇所が中心部であると想定され、現在までの研究では、さらに北側に広がり、現勝浦市浜勝浦一帯、遠見岬神社付近から太平洋に向けて延びた八幡岬までの丘陵地及び尾根に所在していたものと推定されている。

勝浦城の研究史であるが、城の概念図の作成や城の郭内についての推定に重点が置かれ、古くは、1927年に刊行された千葉県による『史蹟名勝天然記念物調査』において、「勝浦城阯」として取り上げられ、勝浦城の位置や沿革、城の本丸等を推定した図面と併せて掲載されている。さらに、これを基にして渡辺包夫氏によって作成された城の概念図が、1980年に刊行された『日本城郭大系第６巻』で取り上げられている。この中では、近世の時期とそれ以前の時期の城内構造を詳細に細分しており、この後の研究の根幹となっている。

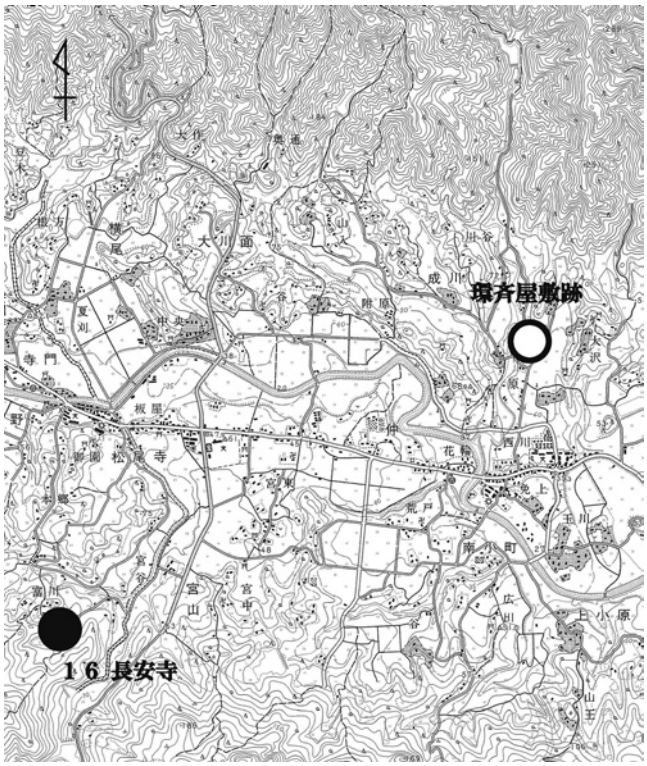
一方で、文献史料では、史料としての信憑性に欠けるとされる『房総軍記』や『房総軍記』を引用した『夷隅郡誌』の中で、里見左馬頭（義康）の家臣安西遠江守が大将として、勝浦城を攻め落とそうした際に、



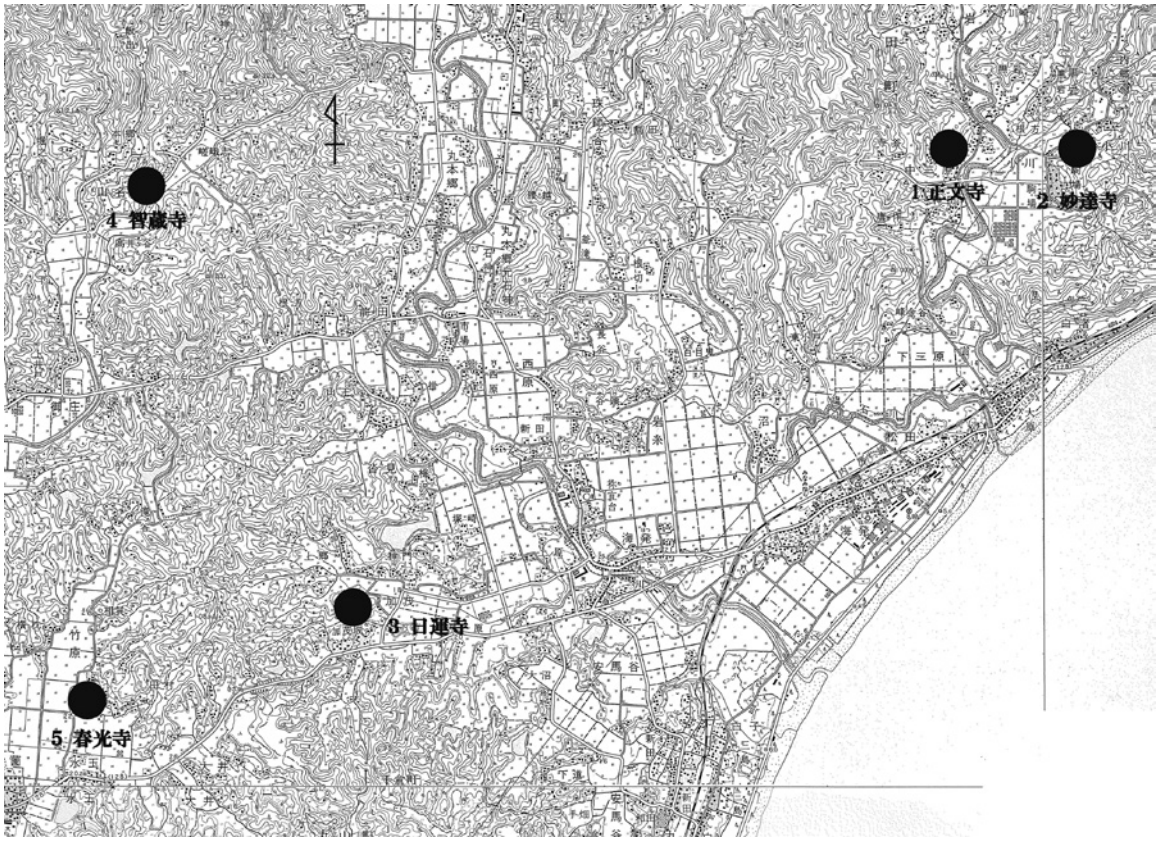
第２図　勝浦市内所在本論考関連遺跡位置図（1/40,000）
（国土地理院発行1/25,000地形図）「勝浦」、「安房小湊」を一部改変



第３図　鴨川市内所在本論考関連遺跡、寺院位置図（1/40,000）
（国土地理院発行1/25,000地形図）「安房小湊」、「鴨川」、「安房和田」を一部改変



第４図　鴨川市内所在本論考関連遺跡、寺院位置図（1/40,000）
（国土地理院発行1/25,000地形図）「安房小湊」、「鴨川」を一部改変



第５図　南房総市、館山市内所在本論考関連寺院位置図（1/40,000）
（国土地理院発行1/25,000地形図）「安房古川」、「安房和田」を一部改変

城主である正木左近大夫が在城して交戦している記載がある。その際の勝浦城について、「要害堅固」、「切岸を襄らん」等の記載があり、難攻不落の城であった様相が明らかとなっている。

その後、様々な里見氏等に関わる研究論文や房総の城郭を題材とした論考の中で勝浦城が取り上げられているが、概念図を基に考察を行っている主なものとしては、千葉県教育委員会が主体となって行った千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査がある。この調査の成果報告書は旧上総・安房国地域の内容について1996年に刊行され、勝浦城に関しても勝浦城跡として含まれている。概念図は椎名幸一氏が作成しているが、1927年に千葉県によって作成されたもの、1980年に渡辺氏によって作成されたものよりも、地形図上から郭についての記述が明確にされている。また、2000年に千葉県文化財センターによって刊行された研究紀要20「房総の中近世城館跡の構造と特質」の中でも、同一の図が掲載されている。

第６図　勝浦城概念図
（1/5,000、小高2018をもとに作図）

こうした概念図の他に、小高春雄氏が地名や現地の地形等を考察して作成したものとして、2000年の『総南博物館企画展図録「万木土岐氏と夷隅の城」』に記載されているもの、これにさらに加筆されているもので、2018年の『図説日本の城郭シリーズ⑨房総里見氏の城郭と合戦』に記載されているものがある（第６図）。

このように勝浦城については、現在までのところ、発掘調査が行われているわけではないため、現状の地形や地名、寺社の存在等から城の様相を推察する形が取られ、城自体を考察しようとする研究が主流となっている。

上記のように勝浦城についての研究状況についてまとめてみたが、ここで本論における勝浦城と正木頼忠の関係について、推論を交えて考察する。

正木頼忠は、天文二十年（1551年）に出生した可能性が推定されているが、この頃に父である時忠は、天文十一年（1542年）に兄である時茂と共に里見義堯に従い、武田朝信の残党が占拠する勝浦城等を攻略し、勝浦城を本拠としていたため、出生時に父子ともに勝浦城及び城周辺に居住していた可能性がある。また、出生後（天文二十年（1551年））から北条氏に人質として送られるまでの期間（諸説あり。永禄五年（1562年）から永禄七年（1564年）の間か。）については、頼忠の所在を知る手掛かりとなる史料はなく、憶測でしかないが、父時忠と行動を共にして、勝浦城や支配領域周辺に在住していたと考えられる。人質として北条氏のもとに送られた後に、父時忠や兄時通が死去したことにより家督を継ぐために、房総に帰国（諸説あり。天正三年（1575年）から天正七年（1579年）の間か。）しているようであるが、文献史料から頼忠が城主であったことを知ることができるものは、天正十八年（1590年）の『毛利家文書』の中に含まれている「関東八州城之覚」に「一　かつらの城　正木左近大夫居城」とあるもののみである。このことから、房総への帰国時から北条氏の滅亡、徳川家康の関東入部による安房国への退去に至るまでの期間に勝浦城主として在城していたと推測される。

勝浦城周辺は、当時の房総における交易の沿岸部の拠点であったことが知られ、滝川氏の論によると、『三

浦文書』の記載内容から、「勝浦は、戦国期の天文十一年(1542年)の段階で、すでに「大船」やほうちやう＝包丁船」の年貢が、領主から課されるほどの湊町だったことが、史料上からも確認される。」（1997 滝川）とあり、城と都市が一体となった港湾都市であったと推定されている。

このことからも、頼忠は、勝浦城及び城周辺部までを支配領域としながら、里見氏や北条氏と共に上総の港湾部の一部を統制していたと考えられる。

なお、現況で城の領域についての概念図に変更の余地はないと考えられるが、一部について私見を付け加えたいと思う。2000年の千葉県立総南博物館による『万木土岐氏と夷隅の城』、2006年の佐藤氏による『図説房総の城郭』、2018年の小高氏の『図説日本の城郭シリーズ⑨房総里見氏の城郭と合戦』において、従来の勝浦城域が北側に大きく伸びることが指摘され、具体的には、遠見岬神社付近まで城郭遺構の存在を推定している。（小高氏は、2018年の著書の中で、この箇所について、「一つのブロックとみなすのは躊躇せざるをえない。」と述べている。）これに関して、この周辺の現在の地形や存在する寺社の縁起、創建年代を確認したところ、城の北限を推定できる材料が浮き彫りとなった。

まず、現行の北限が、北側の丘陵の末端である現浜勝浦に所在する本行寺周辺となっている点についてである。本行寺は、当初長寿寺と号する真言宗寺院で、大同二年(807年)空海の開創と伝えられている。暦応二年（1339年）に日続によって日蓮宗に改宗され、寺名も改められたという。この状況から、本行寺周辺は、平安時代頃から平坦地であったと想定される。掲載した写真（写真２）は、本行寺の裏手に所在していたと考えられるやぐら、もしくは横穴墓が埋没したものと推定されるものであるが、寺の裏手の丘陵は、丘陵上に平坦面が見られず、城の施設が展開している様相は確認できない。また、本行寺の南側に近接して所在している遠見岬神社は、江戸時代初頭に移されたものであり、所在箇所は小規模な平坦面が確認できるものの、勝浦市史にも記載の通り、この時期の造成による改変を否定できない。故に、遠見岬神社周辺の新屋敷地名が残る周辺一帯は、頼忠が城を明け渡した後の近世の時期のものと考える方が妥当であろう。このことから、内宿西ノ谷、木戸脇等の地名が残る周辺一帯を、頼忠の在城時期の北限と想定する。

写真２　本行寺裏手所在やぐら？横穴墓？埋没

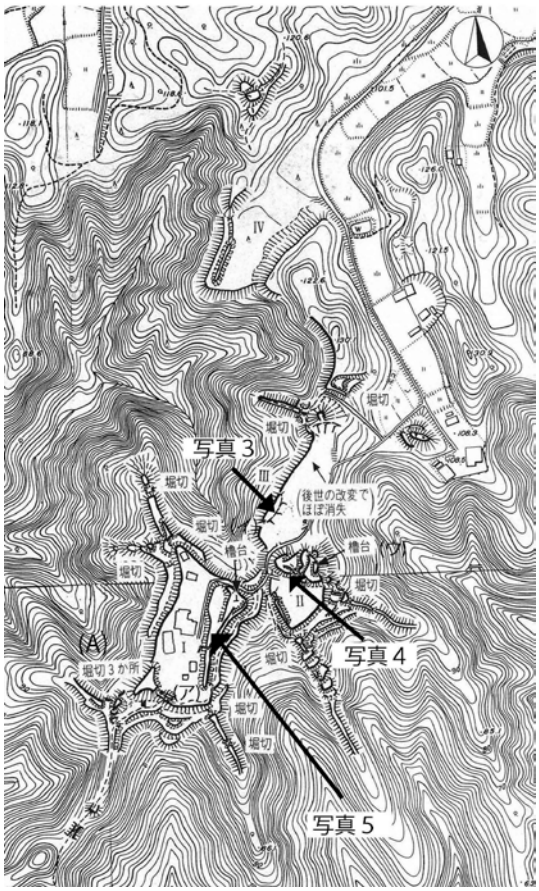
しかし、実際のところ、近世の時期の城の範囲と中世から中･近世の時期の城の範囲について、発掘調査によって明らかとなっていることがないため、明確にどのような区別ができるかも現時点では不明であることが問題であろう。

（２）興津城

興津城は、勝浦市遺跡番号76（県台帳では中－３）興津城跡として、千葉県埋蔵文化財分布地図に掲載されている。城の範囲については、興津港から北方の段丘上、尾根と谷が複雑に入り組んだ丘陵地に所在していたものと推定されている。城の周辺から所在地までは、比高が約120mある。

興津城の研究史であるが、概念図が作成される以前は、城の所在について、過去の文書記載を基に推定するものが多数を占めていた。大正十二年（1923年）に刊行された『夷隅郡誌』では、所在地について記

載され、それは「字要害の山嶺に在り」とあって、様相については「山頂は枡形をなし廣さ四五畝歩あり、二ヶの平坦地即ち城郭の跡なりと傳へ謂ふ、」とある。



第７図　興津城概念図
（1/6,000、勝浦市史編さん委員会2003を一部改変）
※括弧書き箇所は、佐藤2006における
椎名幸一氏作成図の記載事項

その後、1996年の千葉県教育委員会による『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』、2000年の千葉県文化財センターによる『千葉県文化財センター研究紀要20』の中で、椎名氏による概念図が掲載され、丘陵上の南端のⅠ郭、曲輪の東側の大土塁と北端の櫓台、東尾根の先端の櫓台、西尾根の巨大な空堀の遺構の存在が指摘されている。さらに、2006年に発行された『図説房総の城郭』において、椎名氏は「ア東辺の大土塁、イ北端の櫓台、ウ東の尾根の空堀で切断された先端の櫓台、A南側に尾根を断ち切る大堀切、先端の櫓台」と、先に出された概念図の説明を詳細にしている。この他、2003年の『勝浦市史資料編中世』の中で、丘陵上に南側からⅠ郭、Ⅱ郭、Ⅲ郭、北西側の平場をⅣ郭、Ⅰ郭とⅡ郭の東端にそれぞれ櫓台、郭の外側に堀切、Ⅰ郭内の切岸等を推定し、城の構造について詳述している（第７図）。

このように興津城の研究状況について整理を行ったが、発掘調査が行われていないため、概念図の精度を求めることはできない。しかし、勝浦城と同様、概念図の作成によって、城の規模や郭内の状況をある程度視認できるものとなっている。こうした興津城と正木頼忠との関連について、推論を交えて考察する。

文献史料では興津城について、『妙本寺文書』の中に含まれる天正八年（1580年）の『里見義頼書状』に「興津巣城」、天正十八年（1590年）の『毛利家文書』の中に含まれる「関東八州城之覚」には、「一　おつ木の城」と記載がある。城主については、『夷隅郡誌』において、小田原合戦で豊臣軍に敗北するまでの間、「正嘉二年（1258年）に、佐久間兵庫介重吉、同兵庫頭重貞之に在り」、「天文三年（1534年）四月眞里谷朝信の據る所となり幾ならずして大多喜に移る、而してその兵之を保守す」、「同十三年甲辰八月里見氏の臣正木忠之を攻略し家臣岡本大學をして之に居らしむ」と記載がある。このことから、文献史料において頼忠が、興津城の城主であったと推定できるものは現状では確認されていない。しかし、『夷隅郡誌』の吉尾砦址の項目に、「興津城の一分堡たり」とあり、「天文六年正木時忠の爲に攻畧せらる」とあることから、時忠の子である頼忠も吉尾砦（城）の支城として、興津城を保守していたと推測することはできる。

こうした文献史料上の興津城と頼忠の関わりだけでなく、概念図が作成され、興津城跡とされる遺跡としての箇所からも検討を試みる。

現状での興津城跡と推定される箇所を踏査したところ、2003年の『勝浦市史資料編中世』に記述されている郭、堀切については確認することができた。しかし、前述の資料の記述からは、Ⅲ郭について、後世の改変を指摘するものの、他の箇所については指摘がなく、あたかも全ての遺構が良好に残存しているか

のように記載されている。実際のところ、現状では、草木が繁茂し、城に関わる遺構を確認することは容易ではない。特に、Ⅳ郭とするところは、過去に耕作等で土地が改変されている可能性が高く、遺構とするには注意が必要である。また、Ⅰ郭も同様に、現状で保養施設とされる建物が複数あることや、比較的新しい通路がつくられていることから、改変されていることは否めず、当時の平場であると断定することは難しい。さらに、櫓台とする箇所、Ⅱ、Ⅲ郭の平場とする箇所も同様に後世の改変が著しい。

写真３　Ⅲ郭西側切岸状岩壁（東から）

それでは、城跡遺構であるといえる箇所は残存しているのかという疑問が生じる。あくまで私的な考えであるが、Ⅲ郭と推定される箇所の西側の境界に切岸状の岩壁がみえること（写真３）、Ⅱ郭と推定される箇所の北側に切岸状の岩壁がみえること（写真４）、Ⅰ郭の東寄りに切岸状の岩壁がみえること（写真５）のみが、中・近世頃の城郭とするための造成を行った痕跡であると推測する。恐らく小高い丘陵状であった箇所から平場を造る目的で、削平したものと想定される。現状とは異なるとはいえ、こうした造成から、ⅠからⅢ郭まで、城の保守のために造られたものであろう。その形状は、勝浦城と近似しており、丘陵を切り開くタイプの城であったといえる。このような点が正木頼忠の城であることを窺わせる。

写真４　Ⅱ郭北側切岸状岩壁（南から）

写真５　Ⅰ郭東寄り切岸状岩壁（南から）

こうした現状からは、興津城については、発掘調査が行われていないこともあり、全てが推測に過ぎない。しかし、Ⅰ郭とされる最南端からは太平洋を見渡すことができ、東側は狭い谷戸、その他の周囲は、奥深い幾つもの標高差がある丘陵で囲まれていることから、防御性に優れた城であったと想定することは難くない。

（３）　吉尾城

吉尾城は、勝浦市遺跡番号103（県台帳では中－６）吉尾砦跡として、千葉県埋蔵文化財分布地図に掲載されている。この城は、勝浦湾の西側の丘陵から南方に突出した形状の標高40m程の台地上に所在していたものと推定されている。城の範囲について基本的には、分布図で括られている箇所が中心部であるが、現在までの研究では、さらに東西に広がりをみせると考えられている。

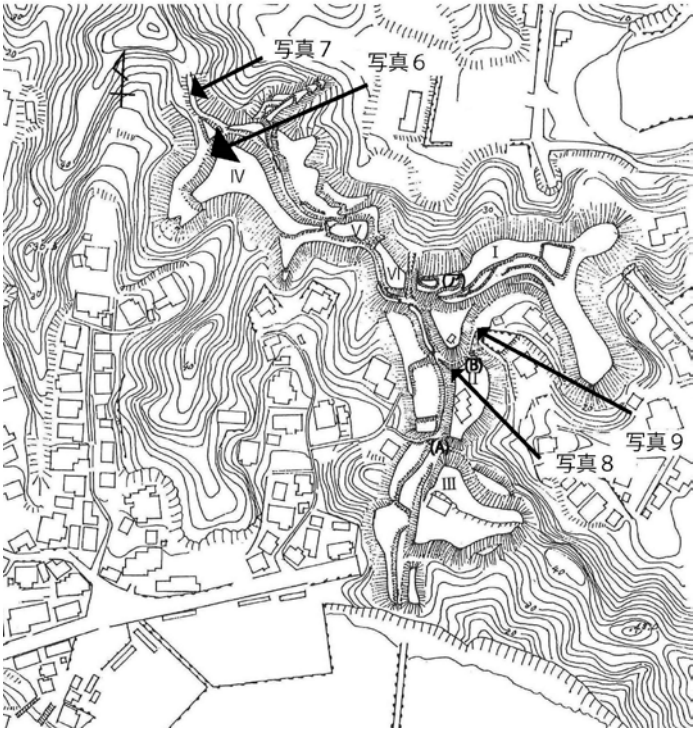
吉尾城の研究史であるが、興津城と同様に概念図が作成される以前は、城の所在について過去の文書記載を基に推定するものが多数を占めている。大正十二年（1923年）に刊行された『夷隅郡誌』では、「吉尾砦址」、「興津城の一分堡たり」とあり、単独の城というよりも興津城の支城のような役割をもっていた可能性がある。これについては、1977年の『松部』にも同様の記載があるが、詳細は不明である。

その後、1996年の千葉県教育委員会による『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』の中で、椎名氏の作成による概念図が掲載され、Ⅰ～Ⅲまでの郭、曲輪の西辺の櫓台、櫓

台周囲と堀切の壁面にある切石積みの石垣の残存、地元で通称「大手門」と呼ばれているⅡ郭の南側の堀切等について述べられている。

これに加えて、2000年の千葉県文化財センターによる『千葉県文化財センター研究紀要20』の中で、椎名氏は1996年の概念図に追加の郭として、北西の丘陵上にⅣ～Ⅵ郭までを記述している。これは、1996年の『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』において、「港を守るため、その後、北方向の丘陵にも城跡が拡張されたものと考えられる。」とあることを、概念図上で示したものと思われる。また、郭の記述の無い縄張図（概念図）と城の構造について掲載している2003年の『勝浦市史資料編中世』では、椎名氏の概念図よりもさらに東側丘陵部への遺構の存在や各郭内の遺構が詳述されている。

その後、椎名氏は2006年の『図説房総の城郭』の中で、2000年の『千葉県文化財センター研究紀要20』における概念図に数点の変更、追加を行っている。それは、従来の概念図の郭について、郭そのものは変更していないものの、番号の付し方について南北の数字を入れ替えている点、北側の丘陵について、「北方の丘陵上にも複数の曲輪群が確認できる。」と記述することに留めている点、掘切箇所を南からＡ、Ｂと２箇所図示した点、北側の櫓台をアとして図示した点である（第８図）。



第８図　吉尾城概念図（1/6,000、千葉県教育委員会1996を一部改変）
※括弧書き箇所は、佐藤2006における椎名幸一氏作成図の記載事項

このように吉尾城の研究状況について整理を行ったが、発掘調査が行われていないため、勝浦城、興津城と同様、概念図の精度を求めることはできない。しかし、概念図の作成により、城の規模や郭内の状況をある程度視認することができる。こうした吉尾城について、本論における正木頼忠との関係について、推論を交えて考察する。

文献史料では、天正十八年（1590年）の『毛利家文書』の中に含まれている「関東八州城之覚」において、勝浦城についての記載に続き、「一　よしうの城　同左近大夫抱」とある。この記載は吉尾城が、勝浦城と同様に頼忠の居城であった事実を知ることができる現況での唯一の史料である。吉尾城の性格については、『夷隅郡誌』の中で「吉尾砦址」とあること、天正十八年（1590年）の『毛利家文書』の中に含まれている「関東八州城々之覚」では、吉尾城の記載がないことから、やはり前述のように支城の役割が強かった可能性が高いといえる。

地理的な条件では、吉尾城が占地する箇所は、現在の字「吉尾」の自然丘陵上で、南側は勝浦湾から西側で、砂子ノ浦の地名が残る箇所の南西の小規模な入り江に隣接している。こうした吉尾城は、勝浦城との位置関係について、勝浦湾を中心として東西に向かい合う形状であるのが特徴的である。

このような地理的状況や、作成された概念図を基に城の郭内をみてみると、南からⅠ郭（主郭）が、現

黒塙トンネルの真上付近の丘陵上に存在するものと推定され、さらにこの地点から北側に向かう丘陵上にもⅡ郭、Ⅲ郭が存在するものと推定され、西側の丘陵上もⅣ郭からⅥ郭までの郭が存在すると推定されているのである。これについては、実際の郭個々の機能を基に検討している論はないため、勝浦城、興津城と同様に海側から比較的に大きな平場が展開している様相をもって推定しているものであろう。

このような現状での吉尾城跡と推定される箇所を踏査したところ、城の範囲について、2003年の『勝浦市史資料編中世』記載とは異なり、2000年の『千葉県文化財センター研究紀要20』の記載に近いものであることを確認した。掲載写真は、城のⅥ郭とされる箇所周辺から東側にかけての範囲で確認した複数の遺構である。積石状遺構（写真６）や土橋状遺構（写真７）が見られ、さらに奥には、細長い丘陵を平坦にする目的や通行する目的として造成された痕跡が確認できる。これらの下は安全上立ち入ることができないことや、樹木が生い茂っていることから視認できる状況ではなかったが、切岸や堀切等も確認することができるものと思われる。さらにⅡ郭とされる付近で堀切遺構（写真８）や切岸状遺構（写真９）を視認したが、この箇所の下からは急傾斜となり、東側への展開は無いことを確認した。この他Ⅲ郭とされる箇所では、民地が多く、立ち入りが困難であることから、確認することができなかった部分がある。この箇所には、遺構が存在している可能性はあるが、非常に狭い丘陵に位置していることから、踏査も含めて詳細を検討することについて今後の課題としたい。

こうした吉尾城の様相からは、城というよりも砦の機能の方が高いものであったと想定し、南、東の二方向は海からの襲来、北、西の二方向は内陸からの襲来に備える防御性をもったものであったと推定する。

写真６　Ⅵ郭周辺積石状遺構（西から）

写真７　土橋状遺構（北から）

写真８　堀切遺構（東から）

写真９　切岸状遺構（南から）

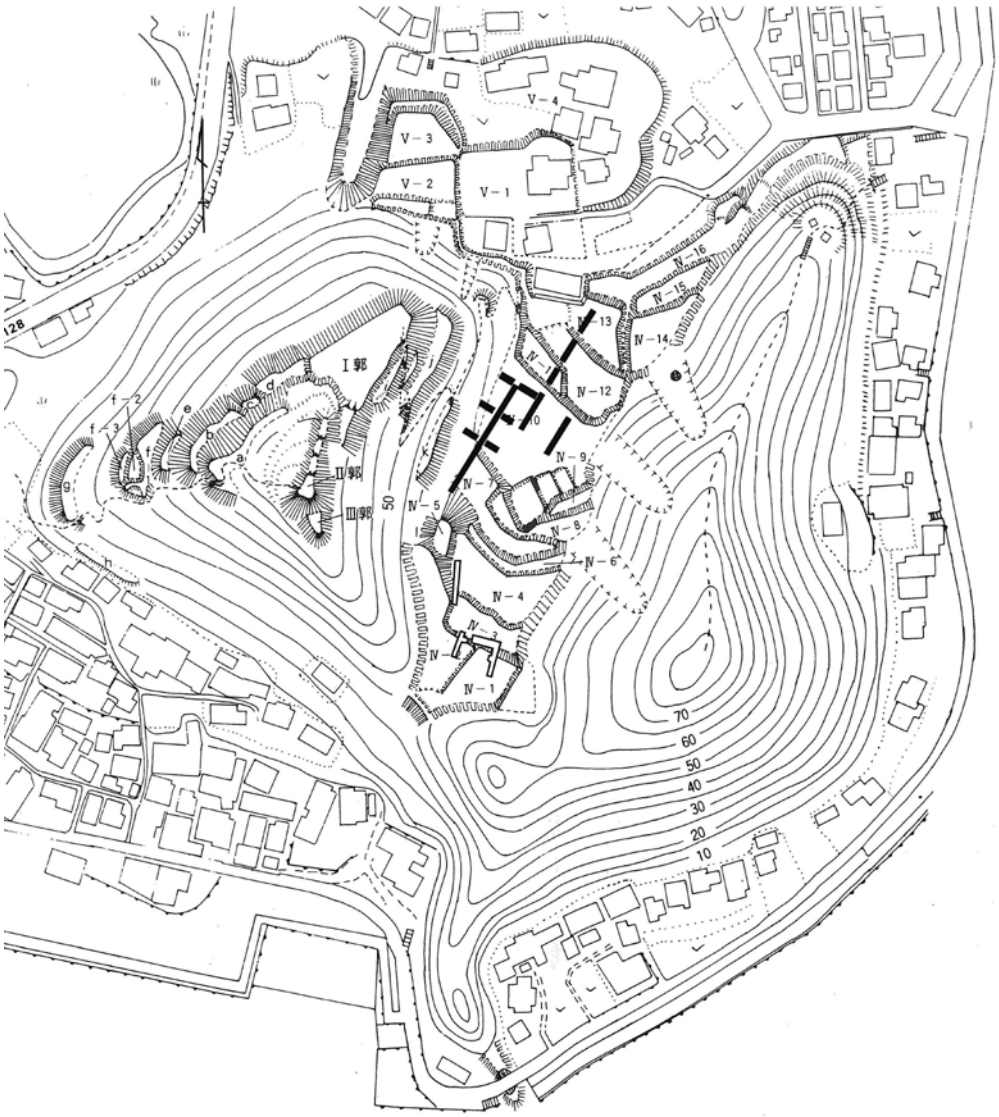
しかし、発掘調査が行われていないこともあり、時期については不明であり、考古学的には正木頼忠との関連も不明であるが、城の形状としては、勝浦城、興津城と近似しており、こうした点が正木頼忠の城であったことをうかがわせる。

（４）葛ヵ崎城

葛ヵ崎城は、天津小湊町・鴨川市遺跡番号24（県台帳では中－３）葛ヵ崎城跡として、千葉県埋蔵文化財分布地図に掲載されている。この城は、鴨川市浜荻、天津との境、二タ間川河口近くの岬状に突出した山麓に所在し、南側は太平洋に接している。城の機能としては、丘陵の西側に集中していたものと推定されており、現在までに作成されている概念図にその詳細が記載されている。

葛ヵ崎城の研究史であるが、古くは大正十五年（1926年）に刊行された『千葉縣安房郡誌』において、過去の文献史料『里見記』の城等に関する記載に基づいた城址の所在地等についての記述がある。その後さらに、昭和五十二年（1977年）の府馬氏の『房総の古城址めぐり上巻』、昭和五十五年（1980年）の君塚氏の『日本城郭大系第六巻千葉神奈川』の中で、過去の文献史料『房総里見誌』、『里見代々記』、『房総軍記』、『日本地理志料』における城の記載に基づいた城址の所在地等の記述が行われている。

こうした、文献史料に基づく城の考察のほか、平成六年（1994年）に刊行された『葛ヵ崎城跡発掘調査報告書』では、中世遺跡として確認されていた葛ヵ崎城跡の一部における土地利用計画に先立ち、発掘調査が実施され、記録・保存されたことに

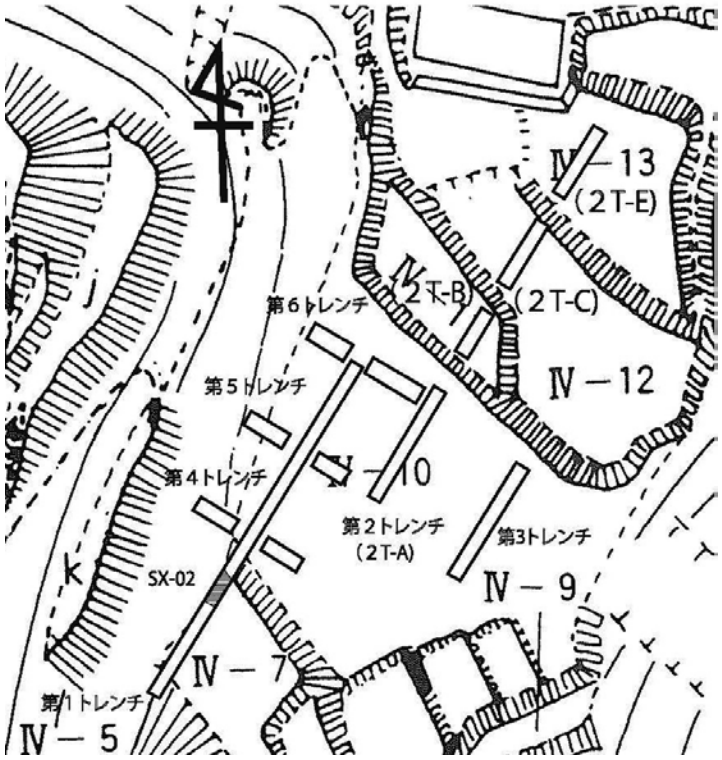


第９図　葛ヶ崎城概念図（1/4,000、畑中2006をもとに作図）
※黒塗りトレンチは1994年調査トレンチ。この他は2005年調査トレンチ。

伴い、状況確認及び概念図が作成された。この報告書の後、平成八年（1996年）発行の『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』における調査成果の中で、「１城館跡分布地図、２城館跡一覧」内に葛ヵ崎城跡が掲載されている。また、平成十年（1998年）に発行された『天津小湊の歴史上巻』の中では、城の性格や城主の特定等について推測されている。(注3) さらに、平成十二年（2000年）発行の『千葉県文化財センター研究紀要20』において、平成六年（1994年）の『葛ヵ崎城跡発掘調査報告書』で調査結果を基に作成された概念図が再掲されている。その後平成十七年（2005年）には、当該遺跡の南方、２つの丘に挟まれた谷状平坦面の頂部で、個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、城跡の様相についての多少の進展がみられたが、この調査が報告されている『千葉県鴨川市葛ヶ崎城跡発掘調査報告書』の中では、概念図に手が加えられることはなく、成果のみが記載されている。(注4) その後、約20年にわたって進展はみられていない。

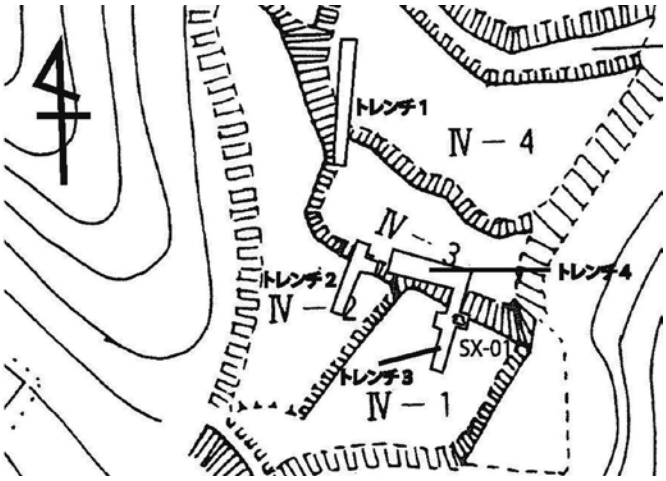
このように葛ヵ崎城についての研究状況について整理してみたが、ここで本論における葛ヵ崎城と正木頼忠との関連について、推論を交えて考察する。

まずは、発掘調査によって検出された遺構や遺物から、現段階の葛ヵ崎城跡にどのような性格付けがなされているかを確認する。1993年から1994年に実施された最初の調査では、東西丘陵の間の谷部北側が調査されている（第11図）。この結果、時期不明の溝状遺構１条、集石遺構１か所、複数の郭内の整地面が検出されている。さらに2005年には、谷部の南側の最奥側までが調査されている（第10図）。この調査では時期不明の集石遺構１か所や複数の段成形遺構が検出されている。このような２度の調査を経て、1994年の報告では、建物等の遺構や遺物が検出されなかったことから、中世段階での状況は不明で、「近世以降は畑地として利用されていたと思われる」とあり、2006年の報告では、「中世段階ではわからないが、近世には農業利用されていたといえる」とあることから、丘陵の谷部について、想定された城の郭内の様相を明確にできなかったが、段切や造成、整地については確認することができたため、1994年の報告時では、「全体として防御施設として十分な機能を果たしていたものと考えている」と結論付けられ、城としての機能があったものと考えられている。

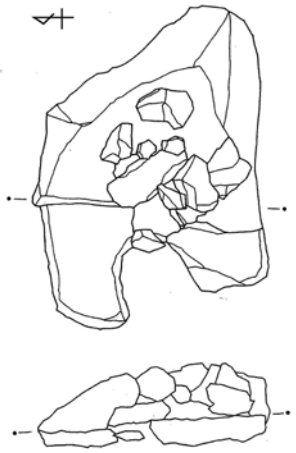


第10図　葛ヶ崎城跡1994年調査トレンチ、検出遺構
（1/1,000、畑中2006をもとに作図）

次に、こうした調査成果から若干の検討を加えたいと思う。1994年報告の最初の調査では、二つの丘陵谷部の北側で、北側から南側にせり上がる段丘上の最北部の箇所であるⅣ郭の13から段丘の中央部南方向にⅣ郭の７まで、南北方向に６トレンチ、東西方向に６トレンチが設定され、各郭内の状況確認が行われた。遺構と想定されるものは、第１トレンチ（Ⅳ－７郭からⅣ－10郭までの確認トレンチ）で確認された



第11図　葛ヶ崎城跡2005年調査トレンチ、検出遺構
（1/1,000、畑中2006をもとに作図）



第12図　2005年調査検出遺構SX-01
（1/50、畑中2006をもとに作図）

溝状遺構SX02、第１、第４、第５、第６トレンチの東部分、第２トレンチ（２Ｔ－Ａ、２Ｔ－Ｂ、２Ｔ－Ｅ）の各トレンチで検出された整地面である。(注５) 溝状遺構SX02は、設定トレンチの中央部で、倉庫などの建物があった可能性が想定される郭部の場所に、東西方向幅4.65m、深さ0.5mで検出されたものである。遺物は無く、基盤層（粘土層）を掘り込み、このトレンチ付近で完結し、竪堀遺構と考えられている。また2005年の調査では、さらに谷部の上部分が調査範囲となり、トレンチが３箇所設定され、Ⅳ－１、Ⅳ－２郭とされる箇所に設定された第２、第３トレンチから段整形遺構が、第３トレンチから南北幅約0.6m、東西幅最大約0.7m、高さ約0.2mの無造作に積み上げられた集石遺構SX01が検出されている（第12図）。

このように東西二つの丘陵の谷部のみで行われた調査で、整地に伴う段整形や土留め遺構、基盤層を掘り込む竪堀遺構が時期不明とはいえ確認されており、城としての防御機能についてある程度の認識を持つ必要があると思われる。

最後に調査成果を含めた頼忠と葛ヵ崎城との関連について考察する。頼忠の叔父であった正木大膳憲時が里見義頼に叛き、里見義頼に臣従していた頼忠の居城の一つであったとされる葛ヵ崎城を攻め落としたのは天正八年（1580年）であったとされている。この時、頼忠は朝夷郡三原郷辺りまで撤退を余儀なくされたが、勢いを取り戻して城を奪還したことが明らかである。恐らく、この時期に頼忠は、葛ヵ崎城の城主とされる角田丹後守一明と共に在城していた可能性があり、城自体はこの後暫く、頼忠方の居城であって、天正十八年（1590年）の小田原征伐の際に、里見氏の所領であった上総国、下総国を没収されたことにより、城は明け渡され、頼忠との関連は途絶えたものと想定される。こうした文献史料上の記載から推定される状況と時期は不明であるが、調査で確認された遺構について重ね合わせて考えると、谷部は、当初城の防御として機能していたが、建物遺構の検出がないことから、城に関わる農業利用をしていた可能性を推定する。当然ながら、城本体の重要な郭部の調査が行われていないため明確なことは不明だが、頼忠が在城、あるいは、城を保有していた際に、新たな戦を想定して防御を固めていたことも考えられる。

このように戦国時代末期において、勝浦城、興津城、吉尾城と共に勝浦正木氏の領国、海上支配を固める拠点として機能していたと考えられる葛ヵ崎城であるが、他の３城と同様、丘陵を上手く利用して湊城のような城郭を形成していた様相を推測する。

２－３　考察

４つの城について、各城の現在までの研究状況を整理し、正木頼忠との関連を推測してきたが、発掘調査が行われていなかったり、行われていたとしても調査成果が乏しかったりということから、考古学的に明確な見解を得ることは難しいものがあった。しかし、現地踏査を行うことにより、城郭遺構と結び付ける根拠となるものを部分的に視認することができたため、憶測止まりになることは避けられた。

このような、４つの城に共通することは、房総の太平洋側の海上交通や沿岸部周辺の陸上交通を支配する上で重要な拠点となり得る場所に築城されていることである。興津城は海との距離が若干離れた場所に所在しているが、海を見渡すことができるという点では、他の３つの城と同じく、海城[注6]に近いものと推測される。

多田氏は、水城（海城）について「織豊系城郭における水城への指向は、一貫した当初からの政権方針とまではいえず、政治的・軍事的・経済的などの様々な要因への個別対応のなかで徐々に形成された政策と考えられる。」（多田暢久2017）と論じている。

房総において築かれたこれらの４つの城についても、里見氏、正木氏という主従関係のもとで、ある程度の城の築城についての様々な要因に対応し、湊や海に近い場所を選地して築城したのであろう。

しかし、興津城もそうであるが、他の３つの城についても海に接する丘陵を利用して築城していることから、海山城（水山城）との形容が適切であろうか。

こうした、房総の太平洋側の海に接した沿岸部の城で他所と交易し、戦への備えや防御を固めていたのであろう。勝浦正木氏の当主としての正木頼忠が、これらの城に関連していた可能性について想像は難くない。

３　正木頼忠と宝篋印塔

３－１　序

正木頼忠の晩年については、「１．はじめに」に記載のとおり明確ではないが、文書記載、遺跡、石造物等を根拠として推測されている。これらの論で共通していることは、①「安房に退去し、現在の鴨川市成川に所在する「環齋屋敷跡」として残る地に、出家して住した。」、②「その後息子の為春と共に、和歌山に移住した。」という２点である。そして、このような論を根拠として調査を試みたところ、考古学的に房総における頼忠の晩年について知る手がかりとなったのは、銘文が残る宝篋印塔であった。

従って、この正木頼忠と関連する宝篋印塔を調査し、実際どのような意義があるのかということについて考察する。また、晩年と関連することであるのか、そうではなくて別の何かと関連するものであるのかということについて検討を試みる。

これを論じる前に、正木頼忠と関連する宝篋印塔が所在する南房総市正文寺について「（１）正文寺、（２）正文寺に所在するやぐら群、（３）12号やぐら脇宝篋印塔」として、寺や宝篋印塔に関わる状況について整理する。

（１）正文寺

正文寺は、南房総市和田町中三原に所在し（第５図）、日蓮宗一致派誕生寺末に属する。この寺の創建は、平安時代に遡る。安元・治承（1175～1181）の頃、相模三浦の党で、三原在住の豪族、真田源吾が真田一族の菩提所として、禅寺を開いたと伝えられている。その後一時中絶し、天正四年（1576年）に正木頼忠

が、父時忠の死去により、先に死去していた兄時通と共にこの寺に葬り、菩提を弔うために日蓮宗の寺として再興したという。

（２）正文寺に所在するやぐら群

正文寺には、本堂・祖師堂裏に12基のやぐらが確認されており、詳細な分布調査や測量調査等が実施されている。この調査成果によると、これらのやぐらが造られた時期ははっきりとせず、やぐら内にある石造物についても、時期は明確ではないが、中世頃につくられたもの、近世段階につくられたものが混在している状況について指摘されている。(注７)

そしてこのやぐら群の特徴の一つに、４号やぐらで確認された５基の浮彫五輪塔がある。これらについて、2020年の調査報告書では、船橋市西福寺所在の鎌倉時代後期の石造五輪塔を例に挙げ、浮彫五輪塔が石造五輪塔の流れをくむものとし、製作年代について14世紀後半としている。

このような、正文寺やぐら群が所在している周辺である三原川中流域は、他に内郷やぐら群、神田やぐら群が知られ、浮彫五輪塔は、各やぐら群に共通して存在していることが明らかとなっている（財団法人千葉県史料研究財団 1996）。

こうした浮彫五輪塔ややぐら群の製作について、在地領主の本拠地として推定される箇所に近いところに、浮彫五輪塔ややぐら群が所在することから、製作者が出自による何らかの意図を示して製作していたのではないかと推測されている（財団法人千葉県史料研究財団 1996）。

（３）12号やぐら脇宝篋印塔（写真10、第１表１）

正文寺12号やぐらは、正文寺やぐら群の中でも、最も東端に造られているものである。やぐらの内部には、後世に造られた墓塔、十一面観音立像等が安置されている。また、やぐらの脇にも後世に造られた墓塔があり、この一つの中に、供養塔である宝篋印塔が所在している。この宝篋印塔は、塔身部に「大檀那」、基礎部に「元和八年　環齋居士　八月十九日」と文字が刻まれている。現存高は2.0mであり、現地表面から約1.1mの高さに台石があり、その上に宝篋印塔が安置されている。

この宝篋印塔は、寺の再興者であった正木頼忠の没後に、一族や関係者によって造立されたものであろう。その理由としては、（１）、（２）にまとめたように、正木頼忠が寺を再興する以前の状況について、やぐら群や浮彫五輪塔を有する寺であったことから推察される。

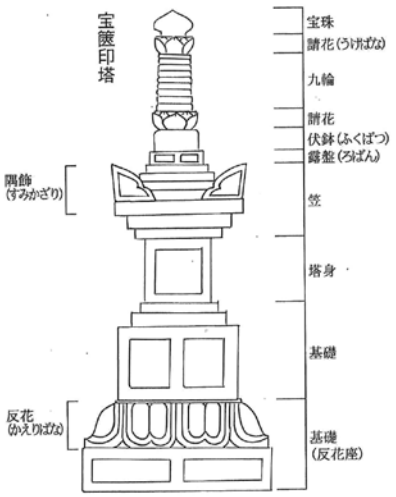
写真10　12号やぐら脇宝篋印塔（第１表１）

３－２　安房地域の宝篋印塔

（３）で記載した正文寺12号やぐら脇宝篋印塔の特徴としては、凝灰岩を使用していること、塔身部が縦長の直方体であること、宝珠部の先端が欠損していること、九輪部の段数が少ないことである。このような特徴について、現在までの関東において研究、集成されている宝篋印塔の特徴と比較し、考古学的な検討を試みたいと思う（第13図）。その為、関東における宝篋印塔の集成を行っている斉木氏の「関東型式宝篋印塔の研究」を参考とするが、この正木頼忠と関連するとされる12号やぐら脇宝篋印塔について、頼忠の晩年が安房地域との関りが強いこともあり、安房地域の宝篋印塔のみを対象とする。

このような宝篋印塔についての検討を試みる上で、前段階で初現期といえる中世期を概観することなく

比較することは難しい。故に、中世期のものについては、主にその特徴を中心として現在までの状況を参考としてまとめ、近世初期のものと対比できるように整理を行った。



第13図　宝篋印塔模式図
（早川2000から引用）

1．中世期における宝篋印塔（注8）

鎌倉時代、南北朝時代、室町時代のものが該当する。これらの時代の宝篋印塔の大方の特徴は、斉木氏の論や池上氏の論を参考とすると、鎌倉時代において数量は少ないが、大形のものが多く、多種多様な各部材のものが多いが、南北朝時代頃から各部材の多様性は少なくなり、中形のものが増え、室町時代には、数量が激増し、小形のものが増えるということが列挙される。

これらのことについては、安房地域でも同様の特徴をもつものがみられるため現状の確認を行うことした。

まず、鎌倉時代に該当するものは、現在までの調査で発見されておらず、個人的にも調査を行なったが発見することができなかった。

次に、南北朝時代、室町時代のものは一定数量のものがみられた。現存最古では、館山市千手院石造宝篋印塔がある。銘文等は確認できないものだが、型式から南北朝前期のものとされている。この他、館山市には、応永八年（1401年）在銘宝篋印塔がある。鴨川市では、大山寺の文和二年（1353年）銘宝篋印塔、神宮寺不動堂の文和四年（1355年）銘宝篋印塔、清澄寺の応永十四年（1407年）銘宝篋印塔、同寺の銘文が確認できない同型式のもの１基がある。南房総市では、正文寺お塚山墓地の正木時通墓、善性寺の宝篋印塔８基（うち２基は部材のみ）は、銘文が確認できないもので、型式が分かるもの６基がある。

写真11　参考中世期宝篋印塔
（館山市千手院塔）

このように中世期での安房地域では銘文の有無はあるものの、関東型式宝篋印塔に分類できるものが12基みられる。これらをサイズの大小で見てみると、千手院塔が190cm、大山寺塔、善性寺④塔、清澄寺塔２基が160cm前後で続き、正木時通墓塔、館山市応永八年銘塔、善性寺⑤塔、神宮寺不動堂塔が100cm前後、善性寺⑥塔が最小の79cmとなっている。このことからは、銘文があるものも含め14世紀中葉頃から15世紀頃までのものが大きく、15世紀以降頃から16世紀中葉頃までのものにかけて小さくなるという傾向を見ることができる。また、塔全体の大小はあっても、塔身部は、塔全体の中でも正方形に近く、小さいものがほとんどである。さらに、九輪部は塔の中でも長大で、大きく造られているものが多いのも特徴の一つといえる。

2．近世初期における宝篋印塔

近世初期の宝篋印塔については、斉木氏の「房総宝篋印塔考」を参考とし、近世初期段階の池上氏の「下総型宝篋印塔」についての論考や本間氏の論考（注9）も併せて参考とする。

この時期の安房地域の宝篋印塔は、斉木氏の論考、館山市教育委員会、南房総市教育員会、鴨川市教育委員会等の調査によって所在が明らかになっているものがある。これらの調査成果に基づき、現地調査を行

い、本論のテーマである正木頼忠に関連する12号やぐら脇宝篋印塔と関わりが疑われるものや類似するものについて集成を行った（第１表）。その結果、南房総市では妙達寺塔１基（写真12、第１表２）、日運寺塔１基[注10]（写真13、第１表３）、智蔵寺塔１基（写真14、第１表４）、館山市では春光寺塔１基（写真15、第１表５）、鴨川市では永明寺塔１基（写真16、第１表６）、多聞寺塔７基（写真17～23、第１表７～13）、心厳寺塔２基（写真24、25、第１表14、15）、長安寺塔１基（写真26、第１表16）を確認した。

今回の調査で集成した安房地域の近世初期の宝篋印塔は、大きいものでは、260cmの永明寺塔、250cmの春光寺塔、225cmの心巖寺塔、210cmの智蔵寺塔、205cmの心巖寺塔のように200cmを超える大型のもの、これらに続いて194cmの多聞寺東条藩西郷正員母供養塔（写真17、第１表13）、187cmの正文寺12号やぐら脇供養塔と200cmに近いもの、170cmから150cmに収まる多聞寺塔６基、長安寺塔１基というように、部材が亡失している２基を除いて、中世期よりも大型のものが多いという特徴がある。このほか、笠部の隅飾りが中世期よりも外反する。また、九輪部は、全体の部材構成の中で小型化していく傾向があり、少ないものでは３段となる。そして、基礎部や反花座部において、反花の表現が中世期よりも簡略化されているものが多いのも特徴の一つである。

さらに、このような特徴をもつ集成した宝篋印塔において、その特徴から①から③グループの大まかなまとまりがあることが判明した。

①グループは、南房総市智蔵寺塔、館山市春光寺塔、鴨川市永明寺塔、鴨川市長安寺塔の４基である。いずれも総高200cm前後の大型のもので、紀年銘は17世紀中葉頃、基礎部や反花座部の反花の表現が覆輪付単弁一葉であり、他の宝篋印塔よりも明確であることが特徴的である。これらは、銘文や塔の所在する場所との関連から徳川政権の大名と関わる供養塔といえる。

②グループは、南房総市正文寺12号やぐら脇供養塔、南房総市日運寺塔、南房総市妙達寺塔、鴨川市多聞寺東条藩西郷正員母供養塔、鴨川市心巖寺塔２基である。日運寺塔や妙達寺塔は、製作当時の部材が不足しているため、実際の総高を推測することができないが、この他については、総高200cm前後の大型のものである。紀年銘は17世紀初頭頃、基礎部や反花座部の反花の表現は風化が激しく本来の状況が分からないものがあるものの、ほとんどが、中世期や①グループのものよりも簡略化されている。これらは銘文から、近世初期における安房周辺地域で躍動していた有力な人物や、有力な人物と関わりのあった人物の供養塔といえる。

③グループは、鴨川市多聞寺塔６基(写真18～23、第１表７～12)である。この全てが総高150cmから170cmに収まるもので、紀年銘は17世紀初頭から17世紀中葉頃のものである。基礎部や反花座部の反花の表現は②グループと同様に風化が激しく、本来の状況が分からないものがあるものの、中世期や①グループのものよりも簡略化されている。これらは銘文から、寺に関連する人物、中世期に安房地域で躍動していた有力な人物を供養するために後世に製作されたものといえる。

３－３　考察

安房地域における江戸初期の宝篋印塔を中心としてまとめ、３グループのまとまりの存在が明らかとなったが、こうした３グループの一つである、②グループにあてはまる正文寺12号やぐら脇供養塔は、鴨川市多聞寺東条藩西郷正員母供養塔を除き、②グループ内の正木家に関連する塔と類似するものであるといえる。これについては、紀年銘の年代が近いこともあり、製作した石工や製作に関わった正木家の一族

写真12　妙達寺塔
（第１表２）

写真13　日運寺塔
（第１表３）

写真14　智蔵寺塔
（第１表４）

写真15　春光寺塔
（第１表５）

写真16　永明寺塔
（第１表６）

写真17　多聞寺塔
（第１表13

写真18　多聞寺塔
（第１表11）

写真19　多聞寺塔
（第１表12）

写真20　多聞寺塔
（第１表７）

写真21　多聞寺塔
（第１表８）

写真22　多聞寺塔
（第１表９）

写真23　多聞寺塔
（第１表10）

写真24　心巌寺塔
（第１表14）

写真25　心巌寺塔
（第１表15）

写真26　長安寺塔
（第１表16）

第１表　安房地域の近世初期宝篋印塔集成表

番号	市町村	寺院名	総高	九輪	隅飾	塔身	基礎	反花座	銘文等	年代等	備考	グループ
1	南房総	正文寺	187㎝	4段	外反する。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で反花は単弁一葉か。風化が激しく判別ができない。	反花は単弁一葉か。風化が激しく判別ができない。	塔身部正面「大旦那」 基礎部正面「元和八年　環齋居士　八月十九日」	元和八年（1622年）	総高は後世の台座部を除く。 宝珠部上部が欠損。 12号やぐら脇供養塔（正木頼忠供養塔）。 凝灰岩製。（写真10）	②
2	南房総	妙達寺	110㎝	無し	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で反花は覆輪付単弁一葉。両隅も覆輪付単弁一葉。一面に三葉。風化が激しい。	反花は覆輪付単弁一葉。両隅も覆輪付単弁一葉。一面に三葉。風化が激しい。	笠部正面に「蓮」 塔身部正面「華」 基礎部正面「慶長十四年□□十月六日」	慶長十四年（1609年）	総高は後世の台座部、隅飾より上の部材（「妙法」線刻の塔身）、五輪塔の火、空輪部材を除く。（正木頼忠の妹、東金城主酒井政辰の妻の供養塔か。）（写真12）	②
3	南房総	日運寺	140㎝	4段	外反する。内部は素面。	時代が異なるもの。他の部材よりも新しい。笠部と基礎部を接着剤？でつないだ痕跡あり。	風化が激しく識別できない。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。一面に一葉。一部風化。	塔身部正面「開山日運上人」 塔身部右側面「七代日性立」 基礎部右側面「天正三乙亥十一月□」	天正三（1575年）	宝珠部上部が欠損。 総高は、時代が異なる部材（塔身27㎝、台座16㎝）を除く。 正木時通供養塔。 右脇に寛文2年（1662年）銘、正木頼忠の笠塔婆墓があり、関連が疑われる。 （写真13）	②
4	南房総	智蔵寺	210㎝	3段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。左側面のみ内側に巻く。	輪郭が二重に施され、内部は素面。 右側面、裏面、左側面に蓮華が刻まれる。	反花式で覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。表現が明確。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。表現が明確。	塔身部正面「松嶽院殿」 基礎部正面「寛永十六己卯歳 喜参宗悦大居士　十一月二十九日」 基礎部裏面「諏訪氏造立之」	寛永十六（1639年） 反花座の型式は、館山市春光寺塔、鴨川市永明持塔、長安寺塔と同一。	総高は後世の台座部を除く。 宝珠部上部が欠損。 安房三枝藩三枝守昌供養塔。（写真14）	①
5	館山	春光寺	250㎝	3段	外反する。一部損壊。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が二重に施され、内部は素面。 塔身の両側面に蓮華と月輪が刻まれる。	風化が激しく識別できない。 輪郭が二重に施され、内部は素面。表現が明確。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。表現が明確。	塔身部正面は風化が激しく視認できない。 基礎部正面「□□□□□　□□□妙佛大姉」	時期不明。 反花座の型式は、南房総市智蔵寺塔、鴨川市永明持塔、長安寺塔と同一。	宝珠上部が欠損。 北条藩屋代氏に関連する女性の供養塔か。（写真15）	①
6	鴨川	永明寺	260㎝	5段	外反する。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が二重に施され、内部は素面。 塔身の両側面、裏面に蓮華と月輪が刻まれる。	反花式で覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。 輪郭が二重に施され、内部は素面。表現が明確。	部材無し。方形の基壇部材あり。	宝珠部正面「鳥」 九輪部正面「空」伏鉢部正面「風」 笠部正面に「火」 塔身部正面「西郷君臣先亡累代」 基礎部正面「地　承應」	承應年間（1652～1654年） 反花座の型式は、館山市春光寺塔、南房総市智蔵寺塔、長安寺塔と同一。	宝珠上部が欠損。 東条藩西郷氏君臣の先亡供養塔。 安山岩製。（写真16）	①
7	鴨川	多聞寺	170㎝	4段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉だが、風化が激しい。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉で、風化が激しい。	塔身部正面「弘安二□年載　妙昭日誠大姉 二月□□□」 基礎部正面「寛永三□　信女尼詠 二月十□」	寛永三（1626年）	総高は後世の台座部を除く。 宝珠の上部欠損。(写真20)	③
8	鴨川	多聞寺	170㎝	4段	外反する。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で反花は覆輪付単弁一葉。一面に一様。両隅も覆輪付単弁一葉。風化が激しい。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。一面に一葉。正面の風化が激しい。	笠部正面「蓮」 塔身部正面「永仁元癸巳祀　醒悟日諦居士 三月十五日北浦忠内」 基礎部正面「□慶安二祀　信女妙胡具尼 十一月九日」	慶安二（1649年）	総高は後世の台座部を除く。 宝珠の上部欠損。(写真21)	③
9	鴨川	多聞寺	160㎝	4段	外反する。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が施され、内部は素面。	風化が激しく、視認できない。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。一面に一葉。	笠部正面「蓮」 塔身部正面「正安三癸巳年　妙諦日醒大姉 十月三日忠□□」 基礎部分正面「寛永九祀　信女妙圓具尼 七月十二日」	寛永九（1632年）	総高は後世の台座部を除く。 宝珠の上部欠損。(写真22)	③
10	鴨川	多聞寺	170㎝	3段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で反花は覆輪付単弁一葉。一面に一様。両隅も覆輪付単弁一葉。一部風化。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。一面に一葉。一部風化。	笠部正面「蓮」 塔身部正面「弘安九□□称　□諦日悟居士 三月十三日北浦忠吾」 基礎部正面「元和四□具　信士厳心 □月廿三日位」	元和四（1618年）	総高は後世の台座部を除く。 宝珠の上部欠損。(写真23)	③
11	鴨川	多聞寺	150㎝	4段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	風化が激しく、視認できない。	反花は覆輪付単弁一葉、一面につき五葉。 一部風化。	塔身部正面「藩□老」 基礎部正面「元弘元□　□老日祐上人　三月十六日□」	元弘元（1331年） ※没年か。	宝珠の上部欠損。 日祐上人供養塔。(写真18)	③
12	鴨川	多聞寺	160㎝	3段	外反する。輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が施され、内部は素面。 塔身の左右に蓮華と月輪が刻まれる。	反花式で反花は覆輪付単弁一葉、一面に三葉。風化が激しい。	反花は均等に間隔があり、覆輪付単弁で一面に三葉。一部風化。	伏鉢部正面「法」 塔身部正面「華経」 基礎部正面「寛永□□　圓大院日行具 十一月一日」	寛永年間（1624～1644年）	宝珠の上部欠損。 伏鉢部は、開弁付単弁八葉。(写真19)	③
13	鴨川	多聞寺	194㎝	5段	外反する。輪郭が施され、内部に輪郭のある月輪が刻まれる。	輪郭が施され、内部は素面。	反花式で反花は覆輪付複弁が二葉、単弁が一葉。一部風化。	風化が激しく、視認できない。	宝珠部正面「妙」 請花部正面「法」 伏鉢部正面「蓮」 塔身部正面「華経」 基礎部正面「元和四□年□正行院殿日定大姉 二月十三日」	元和四（1618年）	宝珠の上部欠損。 東条藩西郷正員母供養塔。(写真17)	②
14	鴨川	心巌寺	225㎝	7段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。反花式で反花は覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。風化が激しい。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。風化が激しい。	塔身部正面「天秀院殿　大姉　長誉壽慶」 基礎部正面「慶長十巳年　前石州夫人　國吏里美左馬頭　義弘長女也　四月四日」	慶長十巳年（1605年）	宝珠の上部欠損。 里見義弘の娘、正木頼房の妻供養塔。 安山岩製。（写真24）	②
15	鴨川	心巌寺	205㎝	6段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。	輪郭が施され、内部は素面。反花式で反花は覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。風化が激しい。	覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。風化が激しい。	塔身部正面「隆崇院殿　居士　心誉長安」 基礎部正面「慶長十六亥　従五位下前石州　正木大膳亮二男　岩見守道俊卿　三月十六日」	慶長十六亥（1611年）	宝珠の上部一部欠損。 正木頼房供養塔。 安山岩製。 （写真25）	②
16	鴨川	長安寺	170㎝	3段	外反する。輪郭が施され、内部は素面。 背面のみ輪郭が施され、内側に巻く。	輪郭が二重に施され、内部は素面。	風化が激しく、視認できないが、表現はみられない。 輪郭が二重に施され、内部は素面。表現が明確。	正面は風化が激しく視認できない。覆輪付単弁一葉、両隅も覆輪付単弁一葉。表現が明確。	塔身部正面「長安院殿」 基礎部正面「□□正文大居士」	反花座の型式は、館山市春光寺塔、南房総市智蔵寺塔、鴨川市永明持塔と同一。	宝珠の上部欠損。 正木大膳時茂供養塔。 現在左脇に、里見義頼室、里見義康の母とされる「龍雲院殿桂窓久昌大姉」、延宝6年（1678）銘の供養塔がある。 時茂供養塔とほぼ同時期の製作と考えられる。 （写真26）	①

の影響によるものと推測される。

関口氏の論考において、「流行にとらわれず一貫して同じ型式を踏襲し造立する〈家〉の墓も存在する。」という、墓標のかたちの継承が家の一族で行われ、「〈家〉意識の表徴」と認識する考えがある。正文寺の12号やぐら脇供養塔においても、同様のことが考えられると思われ、正木家の家意識の表徴として製作され、存在していたものと考えられる。

このように、正文寺12号やぐら脇宝篋印塔には、紀年銘から正木頼忠の供養塔であるとされるが、供養塔という意義だけではなく、房総における正木家の一族意識を後世に残すという意義も併せもっていたのであろう。

4　おわりに

本稿では、房総の戦国期から江戸初期における正木頼忠の証跡に焦点を当て、頼忠との関連が疑われる城跡、宝篋印塔について、現在までの調査状況を整理し、考古学的な検討を加えて論じてきた。

城跡については、発掘調査の成果が皆無に近い状態であったが、過去に作成された概念図や文献史料の記載を参考として現地で踏査を行った。その結果、勝浦正木氏の築城傾向について、海により近い場所を選地していることが浮き彫りとなり、海上支配を目的としていたことは明白で、戦乱時における正木頼忠の城に対する捉え方をうかがい知ることができた。

また、宝篋印塔については、現存する安房地域の宝篋印塔の集成を行いながら、頼忠の供養塔とされるものの考古学的な検証を試みた結果、江戸初期における安房地域の宝篋印塔の傾向について整理することができたほか、墓標の一つの形といえる宝篋印塔に込められた一族や家に対する保守的な思考の一様相もみることができたと考える。

このように本稿において多くのことを考察することができた一方で、城跡については、発掘調査が未だに行われていないものがあり、全容が考古学的に不明な点、宝篋印塔については、安房地域で一部未調査のものがあるため、更に集成を進める必要がある点が今後の課題である。

群雄割拠の戦国時代の中で、自身の置かれた状況を上手く利用して力に変え、生き抜いた人物である正木頼忠。400年以上経った今でも、残り続ける遺跡や石造物から、その存在を推し量ることができるのである。

謝辞

本文を執筆するさいに、ご協力いただきました以下の機関に末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

正文寺、南房総市教育委員会、鴨川市教育委員会、勝浦市教育委員会、館山市教育委員会（順不同）

〈脚注〉

（1）正木頼忠に関わる家系図（第１図）も併せて参照していただきたい。

（2）埋蔵文化財包蔵地として括られる「環齊屋敷跡」は、現地に「正木環斎屋敷跡」案内板が立てられている。（写真１）滝川氏は、「館状の遺構が残されている」とするが、後世の畑地、民家等で大幅に造成されている箇所が多く、土地の現状から屋敷跡と推測することは注意を要する。

（3）城の性格については、「海に向かった城としての性格が強い。特異な形容をした双丘に占地する当城跡は、山頂の郭が狭小で、ほとんど物見的な役割しか果たさない。」、「丘上の居住性は低く、むしろ海及び街道の監視機能に重点が置かれていたもの、と考えられる」とし、城というよりも砦のような機能であったと推定されている。また、城主については、真偽は不明であるが様々な文献史料の記載から、正木氏に近い氏族の人物である「角田丹後守一明」との名称が掲載されている。

（４）1994年、2006年刊行の調査報告を基に、調査時に城の郭内に設定したトレンチをまとめた概念図を掲載した。（第９図）

（５）第２トレンチ（２Ｔ－Ａ）のほぼ中央部西側で、隅丸方形を呈する土坑状の掘り込みの集石遺構（ＳＸ－０１）とされるものが検出されている。掘り込みの内部から見つかっている大小の石は、据え置かれた状態ではなく、上方から投棄されたものと推測されている。この遺構について報告書では、「土坑の性格は不詳であるが、畑地の境に位置していることから耕作に係わる遺構と思われる。」と結論付けている。

報告書に掲載されている図等からは、この遺構が、整地面より新しい時期ものである（時期は不明）ことは明白である。しかし、整地面のより詳細な時期を推測する有力な手掛かりとなり、この遺構に伴う遺物として、報告書には、「坑内には図示できないほどの小片の陶磁類が出土している。時期判断は難しいが比較的新しい近世の所産と考えている。」との記載があり、陶磁類の資料実見を試みようと、鴨川市の永井宏直氏に依頼したが、所在不明となっているとの回答を得て断念した。

（６）多田氏は「城郭立地については、通常使われる山城・平山城・平城の区分とは別に「沼・湖・海・河などに拠って設けられた」水城があり（鳥羽1995）、海に面するものは特に海城と呼ぶ。」と述べている。（多田2017）

（７）北東部のやや角部にある９号やぐらの石造物について、「中世以前の石造物は、中央から東側に部材の集積が認められた。近世以降の墓石を安置する際に配置されたものである。」（千葉県教育委員会2020）との記載があり、やぐら内が後世に改変されている状況が明らかである。

（８）中世期の安房地域の宝篋印塔の代表例として、館山市の千手院塔を掲載した。（写真11）

（９）本間氏の「石塔・墓石の型式学－南関東の宝篋印塔を中心に―」『季刊考古学149』を参考としている。

（10）南房総市日運寺には、南房総市市指定文化財の寛文2年（1662年）銘正木頼忠墓とされる笠塔婆が所在している。「當山地領願主」との銘文から、頼忠の死後である17世紀中葉頃に、正文寺所在の宝篋印塔とは紀年銘の時期や塔形は異なるが、日運寺の領主や正木一族の末裔等が祖先崇拝を目的として製作したものであろう。

引用・参考文献

天津小湊町教育委員会　1994『葛ヵ崎城跡調査報告書』
天津小湊町史編さん委員会　1998『ふるさと資料 天津小湊の歴史　上巻』天津小湊町
天野努　2009『図説 安房の歴史』株式会社郷土出版社
池上悟　1994「下総型宝篋印塔について」『立正大学人文科学研究所年報 31号』立正大学人文科学研究所
石田茂作　1969『日本佛塔の研究』講談社
夷隅郡役所　1972『夷隅郡誌』株式会社名著出版
伊藤一男　1991『房総戦国土豪の終焉－小田原落城と両総の在地勢力－』崙書房出版株式会社
小高春雄　2018『図説日本の城郭シリーズ⑨房総里見氏の城郭と合戦』戎光祥出版株式会社
勝浦市史編さん委員会　2003『勝浦市史 資料編　中世』勝浦市
勝浦市史編さん委員会　2006『勝浦市史 通史編』勝浦市
鴨川市史編さん委員会　1996『鴨川市史 通史編』鴨川市
鴨川市教育委員会　2013『鴨川の石造物百選』
川勝政太郎　1957『日本石材工芸史』綜芸社
川勝政太郎　1960「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉 第４号』鎌倉文化研究會
川勝政太郎　1979「中世における石塔造立階級の研究」『史迹と美術 第500号』史迹美術同攷会
川名登　1989「房総正木氏について－残された文書を中心に－」『商経論集 第22号』千葉経済短期大学
黒田基樹　2008『戦国の房総と北条氏』有限会社岩田書院
國史研究會　1916『国史叢書 千葉傳考記 小田軍記 小田天庵記 房總軍記 里見九代記 』
斎木勝　1980「房総宝篋印塔考」『物質文化　35』物質文化研究会
斎木勝　1983「補遺「房総宝篋印塔考」『貝塚　31』物質文化研究会
斎木勝　1986「関東型式宝篋印塔の研究」『千葉県文化財センター研究紀要10 －10周年記念論集－』千葉県文化財センター

斎木勝　1995「石塔婆としての宝篋印塔について」『千葉県文化財センター研究紀要16 －20周年記念論集－』千葉県文化財センター
斎木勝　2008「宝篋印塔の地域的特色」『月刊考古学ジャーナル６月号特集石造塔婆研究の現状 第573号』株式会社ニューサイエンス社
埼玉県教委員会･千葉県教育委員会編　2000『都道府県別 日本の中世城館調査報告書集成　第６巻 関東地方の中世城館〈２〉埼玉・千葉』村田修三・服部英雄監修 株式会社東洋書林
財団法人千葉県史料研究財団　1996『千葉県史編さん史料 千葉県やぐら分布調査報告書』千葉県
財団法人千葉県史料研究財団　2007『千葉県の歴史 通史編 中世 県史シリーズ３』千葉県
佐藤今朝夫　2006『図説房総の城郭』株式会社国書刊行会
城郭談話会　2017『織豊系城郭とは何か－その成果と課題－ 城郭談話会30周年記念』村田修三監修 サンライズ出版
鈴木昭　2003『千葉県鴨川市　湯貫田遺跡・花輪遺跡－ほ場整備事業（県営担い手育成）下小原地区埋蔵文化財調査業務 財団法人総南文化財センター調査報告第47集』財団法人総南文化財センター
関口慶久　2019「墓標から見た＜家族＞」『季刊考古学 第149号 特集墓石の考古学』株式会社雄山閣
滝川恒昭　1998「その後の勝浦正木氏」『勝浦市史研究 第４号』勝浦市教育委員会
千葉縣　1927『史蹟名勝天然紀念物調査　第４輯』
千葉県教育委員会　1971『千葉県中近世遺跡調査目録』大日本印刷株式会社
千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』株式会社弘文社
千葉県教育委員会　2012『千葉県館山市千手院やぐら群-千葉県やぐら調査報告書-』
千葉県教育委員会　2016『千葉県南房総市内郷やぐら群・善性寺やぐら群-千葉県やぐら調査報告書２-』
千葉県教育委員会　2020『千葉県南房総市正文寺やぐら群-千葉県やぐら調査報告書３-』
千葉県文化財センター　2000『千葉県文化財センター研究紀要20』株式会社弘文社
千葉県文化財センター　2000『千葉県埋蔵文化財分布地図(４)－君津・夷隅・安房地区（改訂版）－』株式会社新興社
千葉県文化財センター　2013『千葉県文化財センター研究紀要28』株式会社正文社
千葉県立総南博物館　2000『総南博物館企画展図録「万木土岐氏と夷隅の城」』
千野原靖方　1986「正木時茂・時忠の東上総支配について－小田喜衆の形成と正木領－」『千葉県の歴史』第31号 千葉県
千野原靖方　1992「正木時茂と一族」『千葉史学』第20号 千葉歴史学会
千葉縣安房郡教育會　1991『千葉縣安房郡誌（復刻版）』
滝川恒昭　2008「第３部 領国のなかの地域 房総からみた戦国大名北条氏」『中世東国の世界３ 戦国大名北条氏』高志書院
館山市立博物館　2000『市民読本 さとみ物語 戦国の房総に君臨した里見氏の歴史』
永塚俊司・木原高弘　2020『千葉県南房総市正文寺やぐら群－千葉県やぐら調査報告書３－』千葉県教育委員会
畑中博司　2006『千葉県鴨川市　葛ヶ崎城跡発掘調査報告書』鴨川市教育委員会
早川正司　2000『天津小湊の石造物』天津小湊町
早川正司　2006「南房総市千倉町出現の貞治銘五輪塔とその周辺」『房総の石仏 第16号』房総石造文化財研究会
平井聖・村井益男・村田修三編　1980『日本城郭大系　第６巻　千葉・神奈川』児玉幸多・坪井清足監修 株式会社新人物往来社
府馬清　1977『房総の古城址めぐり 上巻』有峰書店
本間岳人　2019「石塔・墓石の型式学－南関東の宝篋印塔を中心に－」『季刊考古学 第149号 特集墓石の考古学』株式会社雄山閣
松部調査団　1977『松部』千葉県文化財保護協会
立教大学考古学研究会　1974『千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料編）』
立教大学考古学研究会　1999『千葉県夷隅川流域調査資料集』
和田町　1994『和田町史 通史編 上巻』
和田町　1991『和田町史 史料集』